第69回　大阪府青少年読書感想文コンクール・府2
　小学校中学年の部　特選
　「フードバンクどろぼうをつかまえろ！」を読んで
　寝屋川市立三井小4年　藤野朋花さん

「冷蔵庫の中のあたたかみのある黄色いライト」私はこの文を読んで、自分の家の冷蔵庫を開けてみました。冷たい色のライトで照らされた食材が、奥までぎっしり詰まった冷蔵庫で、ネルソンの家とは全くちがったものでした。

私はネルソンのように、家にある食材一つ一つに思いをめぐらせたことなどありません。生活のちがいで、物の感じ方はこんなにもちがうのかと、衝撃を受けました。ネルソンにとって冷蔵庫は、ただ食材を冷やす物ではなくて、大切な食材が入った宝箱のような物だから、温かみのある色に感じたのではないかと思いました。

経験したことの無い生活を知って、私の当たり前は決して当たり前ではないと気づきました。こんなにも毎日空腹に襲われる事にたえて、乗り切る生活をしなければいけないという事を、考えたこともありませんでした。

ネルソンにとって世界で一番いい銀行というくらい夢のある場所、フードバンクの事を、もっと知りたくなりました。調べてみると、私の街でフードバンクのようなものがある場所は限られていて、当たり前のようにスーパーに置いてあることはなく、まだまだ私の街には広まっていないのだと感じました。

この本のように、当たり前のようにスーパーにフードバンクのカゴが置いてあって、みんなが生活の中で寄付をすることがふつうになる世界が実現できたら、どれだけの貧困で苦しんでいる人達を救えるのだろう、何か自分に出来ることはないだろうかと、行動したくなる気持ちがわき上がってきました。

この本を読み終えてから、自分の街で食料品の寄付が出来るサイトを、家族と探して見つけました。私が出来ることはとても小さなことかも知れないけれど、お手伝いで貯（た）めたお小づかいを使って、初めて食料を寄付しました。寄付に選んだのは、ネルソンのほしい物リストにあったお菓子です。それが誰かの元へ届いて、喜んでくれる人がいることを想像すると、とても嬉（うれ）しくなりました。注文の決定ボタンを押す時のドキドキした気持ちは今も忘れられません。

誰かの助けになるためには、起きている問題を自分から知ろうと努力したり、その事を、誰かに伝えることが大切なのだと思いました。

自分も苦しいのに、母親や妹を優先して思いやる気持ちや、朝食クラブに通う友達の生活を心配して、どろぼうをつかまえようと行動したネルソンの勇気あるすがたに、心を打たれました。また、迷うことなくネルソンの力になろうとした友達のように、私も大切な友達が困っている時に、すぐ力になれるような立派な人になりたいと強く思いました。

教室で机をならべるクラスメイト達が、毎日楽しく学校に通えて、明日をワクワクした気持ちで希望を持ってむかえることが出来るような世界を、決して貧困でこわされることがないようにと、心から強く思いました。（「秘密の大作戦！フードバンク泥棒をつかまえろ！」オンジャリQ．ラウフ　訳・千葉茂樹／あすなろ書房）